

東国語脈で書かれた抄物 一三二

—江戸初期東国方言研究資料—

金 田 弘

だ、京阪語資料としての抄物や、キリシタン物からわずかその面影を知り得るにすぎない。

もっとも、新村博士が「東方言語史叢考」の中で挙げておられる「人天眼目抄」「禪林類聚抄」や小林好日博士が「日本文法史」で引用しておられる「湯山千句」「葛藤集」など関東系の抄物類と見られているものがないではないが、それにしてもいまだその資料としての価値については具体的な調査・報告がなされていないのが現状である。従ってこの際東国語で書き表わされた資料を発見することが出来れば、室町末期から江戸初頃にかけての京阪語の資料と比較できる便もあって東国語研究を一步進めることが出来るものと考えられる。また、それだけではなく国語史上に大きく寄与することは疑いもないであろう。なお、他方、江戸語との結び付きの上で諸方言の影響を受けた混血児と云われ、あるいは東国語と上方語を父とし母として生まれた混合語と云われる江戸語の形成・性格を明らかにする上でも大きな役割を果すことと思われる。

一
京阪を中心とした言語の研究に比して、三関または三河以東の言語といわれている東国語については殆どその実態が明らかになっていないといっても過言ではなからう。特に天下の実権の中核地が東国に置かれた鎌倉時代以後——室町期に東国の武將足利氏が上洛して幕府を開いた時代の東国語は、太平記の公家たちまでがいつしか云いも習わぬ坂東声を使うという記事が示すように、東国語が抬頭進出して京阪語に大きく影響を与えたという意味で単に東国語だけでなく、国語史の上からも見逃せない重要な時期と考えられる。事実、太平記のような一般論はまだしも、小林好日博士が室町末期の京阪語に起った促音便、撥音便の現象を東国語の影響によるものという説を始めとして、諸氏が「ナンダ」「ウ・ヨウ」「F」(h)などの室町期における京阪語の諸変化の現象を取り上げられて、いずれもその起因を東国語の影響に求めておられるほどである。しかしながら、そのように重要性を持つ当時の東国語も今までのところほとんどその資料がなく、た

出すこと、また、国語史上、新たなものが生じた時は一応東国語の影響ではないかと疑ってみて、それを手掛かりとすることなども考えられようが、ともに、云わば間接的資料としかなり得ず、また、あくまでも素描ということばでしか云い表わせないものである。それにはやはり、この方面の資料を博捜し、資料の発見に努めることよりほかに道はない。

註1 最近、福島邦道は「国語（文理大終語記念号）」で「人天眼目抄」（足利学校蔵）・「禅林類聚抄」（京都大學蔵）が東国語資料として価値のある抄物であることを紹介された。それによると両者とも大体で書かれ、「人天眼目抄」は天正三年以前の成立という。

二

ここで一つ手掛かりとなることは、明治三十九年、上村観光氏が国語調査会の委嘱によって、東京（宮内省国書寮・内閣文庫・帝國図書館・東大図書館・同国語研究室）・足利学校の抄物を採訪せる記「関東に現存する古抄本」で東国語の資料の存在を明らかにされていることである。——（このことはさきの新村博士の「東方言語史叢考」でも触れておられる。）しかし、その際明らかにされた抄物は語脈全部が東国語であるのではなく、わずかに助動詞「ダ」を散見するにとどまったのである。だが同じ上村氏の論の「室町時代関東の学問」「論語抄解題」や川瀬一馬氏の「足利学校の研究」によれば、諸本に当時鎌倉五山、足利学校及び関東各地の禅刹へ各地より笈を負うて集った事実が見られ、それも京洛を中心とするものとは違った独特の学風を保って、決して京の模倣のみ

に終始していなかったことが記されている。このことからして、すでに室町時代には東国でもかなり広く学問が普及していたことがうかがえるが、なおまた、禪慈弘氏によって、東国での仏教史の歴史は古く、天台第三世座主円仁（慈覚大師）は下野都賀郡に生まれ、同郡の大慈寺にはじめて学を受けており、その後とても大師に続くものが関東に少くなかったことが報告されている。とすれば関東教学史の上からみて、禅宗系統をはじめとして足利学校関係および天台宗系統などに東国語脈で書かれた抄物が、このような雰囲気の中で生じる可能性も考えられてくるのである。

しかしてここに、少し前には亀井孝氏が

畏友中村通夫君の談によれば、関東方言資料と見られる「大淵代抄」にも「さかいに」の例をみるとのことである。筆者自身も同一著者の「大淵和尚再吟」はみたがこれには……

と近くは池上禎造氏が

前期江戸語の乏しい文献にも曹洞宗関係の抄物（大淵和尚再吟）などに例を見るのである……⁽⁶⁾

と曹洞宗関係の抄物「大淵代抄」「大淵和尚再吟」が存在することを明らかにしておられるのを見るのである。だが、両氏ともこの二書については右の程度の紹介であって、いまだその輪郭は明らかにしておられない。仄聞するところによれば、この両書とも昭和十年頃橋本博士が東大の特殊講義で紹介されたそうである。

ここでは、その存在を明らかにされているこの両書と、その後見出した一書「巨海代抄」を加えて、三書を調査して明らかとなった、云わば三書の輪郭と著者などについて若干の記述をなし紹介にかえることにしたい。

註 1 「禅宗」第一八七号（明・43・10）

註 2 禅林文芸史譚（大正8年）

註 3 成實堂叢書第十册別冊

註 4 「所謂中古天台の関東伝播について」大崎学报・第八

十八号（昭・11・7）

註 5 「理由を表わす接続詞さかいに」方言第六卷第九号

（昭10・9）

註 6 「改訂」国語の歴史」第四篇近世

三

三書はともに駒沢大学図書館所蔵のものによった。三書の輪郭について述べると、まず「大淵代抄」は、冊子本袋綴で美濃本タテ八寸七分ヨコ六寸四分、八卷四冊、内題を欠き、外題に「大淵代抄」と題し、その下に「二三四と冊数を示し、尾題に「大淵之抄」と巻数とが記されてある。柱刻は、「大淵代抄」とあり、巻数と丁付けがある。本文に界なく、黒色单边をもってかこまれ、各巻の丁数は

一卷 四十四丁 二卷 五十二丁 三卷 五十九丁 四卷 三十九丁 五卷 四十丁 六卷 三十六丁 七卷 三十六丁 八卷 四十三丁

刊語に当るものに

安国山総寧禪寺寂靈十九世孫授法

良和尚大淵文刺大禪仏下語并抄終（七ノ四）（十三ウ）

があるが、これより表題の代とは下語のことで、それを註を加えたものであることがわかる。刊記は

慶安己丑孟秋吉旦寺町誓願寺前西村又左衛門板行

とある。本書は大淵和尚が禅林類聚・伝燈録・永年正法眼蔵などの内典や莊子・詩学大成・古文真宝などの外典から語要詩偈の類を掲げ、撻語でその淵旨を呈示し、代語で自らの意見を述べその代語に加註した大淵和尚の提唱本である。

「大淵和尚再吟」は「大淵代抄」より後の万治二年仲春吉旦の刊で、板元は同じ。上中下の三卷三冊、美濃本タテ八寸六分ヨコ六寸三分。題簽は駒大本は新しく書き改めたものであるが、内題と同じく、「大淵和尚再吟上 中下」とあり、尾題には「大淵和尚再吟 卷之上 卷之中 卷之下」とある。柱刻は「大淵再吟上 中下」と丁付けがある。刊語に当るものなく、本文は「代抄」と同じで、各巻の丁数は

上卷 三十六丁（目録一丁・本文三十五丁）
中卷 三十七丁（目録一丁・本文三十六丁）
下卷 四十一丁（目録一丁・本文四十丁）

本書は諸書より各種の古則公案に関する頌古を引き、更にそれについての先人の意見を引用して、それに対する自己の見解を述べながら、その淵旨を提唱したものである。「巨海代抄」も前記二書と同じく板元は寺町誓願寺前西村又左衛門。「大淵代抄」より後の承応癸己仲夏吉旦の刊。その体裁は「大淵代抄」と同じで、上下二卷二冊から成り、題簽には「巨海代抄 上 下」、尾題に「巨海代之抄 上 下」、柱刻は「巨海代抄 上 下」と丁付けがある。本文に界なく、黒色单边をもってかこまれていることは前記二書と同様。刊語に当るものなく丁数は、上卷 三十二丁、下卷 四十丁である。その内容は各種の禅籍から祖師の語要詩偈

を抄出し、その語義を明らかにするとともに、代語で自らの意見を述べ、その代語に加註してある形式をとっているが、本書本文中にはその加註のみが記され、引用句、代語はない。その点前記二書とは異っている。

四

さて三書の成立期であるが、「再吟」「巨海代抄」にはそれについて明記されていないが、ただ「大淵代抄」は各巻の郭外頭註によつて、

卷一 元和七年——元和九年

卷二 元和九年——寛永二年

卷三 寛永二年——

卷四 寛永四年——寛永六年

卷五 寛永五年——寛永六年

卷六 寛永六年——寛永七年

卷七 寛永七年——寛永九年

卷八 寛永九年——寛永十二年

の代并抄であることが明らかとなり、従つて「大淵代抄」は元和七年（詳しくは同年十二月十五日）から寛永十二年（五月五日）までの間に成立したことになる。また、後に述べることでもあるが、卷一から卷二の一部は武蔵国比企郡広正寺で、卷二の一部から卷八の一部は常陸国下妻多宝院で、残りは下総総寧寺での代并抄である。

他の二書の内「巨海代抄」についてはこれを語る記事がないでもない。同書下卷三十四丁ウに

……此ノ句ヲ用タハ当寺ハ開山越翁和尚ノ忌日ニ當ツタニヨ
ツテ此句ヲ設ケタ越翁ノ乗安寺ヲ建立在テ法幢盛ニ行ジテ
ザ在ツタ天下ノ兵乱故エ其ノ已後三十年ノ余リ門庭衰廢シテ
山中モ荒野トナツテアセハタタ処ヲ今又山僧ガ出デ、当山ヲ
祈リ開テ開山ニ勸定申スガ補維シヨウタ

とあり、総寧寺八世の越翁周超が乗安寺（遠江掛川）を開山したのは享祿三年頃と思われるから三十年後の永祿年間よりの後の事と考えられる。しかしまた、本書には、

海声ハ名也デ將軍ノ威勢佳色ノ事ダ本朝デモ大政ノ入道ヤ頼
朝儀經今ノ秀吉ナドハ異國マデ其ノ名蔽レナイ人達ダ（下・
十五ウ）今マノ秀義ナドノ様ニ天下ヲ領ズルホドノ人が少モ
曇クラバ四海ハクラヤミトナ郎ズ（下・十九オ）

と諸所に秀吉の名が見えるが

今マ関白秀吉ナドハ聚洛ノ内ニ在リナガラ高麗震旦國マデ収
メラレタ（下・三十四オ）

とあることからして、天正末期から文祿慶長頃までの間の代并抄と見た方が妥当であろう。「大淵和尚再吟」については全くこれを語る資料を欠くが、おそらく「大淵代抄」と前後して成つたものと思われる。

註1 望月信享 仏教大辞典 総寧寺の項

五

さらに著者についてであるが、まず「大淵代抄」「同再吟」の著者大淵文利和尚について述べると、「日本洞上聯燈録」（卷十二）に、

下総州総寧大淵文刹禪師。參勝国二得レ旨。関四五刹一至多
宝。寛永甲戌稟二釣命一住三総寧一。(以下略)

とあり、寛永十一年に幕命をうけて下総国総寧寺(現在、総寧寺は千葉県市川市国府台に存するが、当時同県の東葛飾郡関宿に在った。)入院している。同寺の過去帳によると寛永十三年四月八日寂とあることからして、総寧寺十九世大淵文刹禪師の晩年は下総関宿に住していたことが明らかとなり、また、おおよその出生年も推察できよう。しかして同禪師の郷貫については不明である。ただ、総寧寺入院までの経歴について、代抄郭外頭註に

元和七年十二月十五日 広正寺入院(卷一)

寛永二年正月二十八日 多宝院入院(卷二)

寛永十一年^{甲戌}仲冬三日 総寧寺入院(卷八)

とあることからして、聯燈録に記された多宝院の前に広正寺に住していたことが明らかとなる。高木山広正寺は武蔵国比企郡七郷、潜龍山多宝院は常陸国真壁郡下妻にある。従つて関東に存した禅寺を閲て総寧寺に入院したわけである。このことは、「代抄」本文中の左の記事が裏書きしているよう。

山中ノ人ト云ハ父。夫山ガナドニスム樵夫ノ一

(二ノ三十四ウ)

其上当山ハ松庵一派ノ古道場ト云イ灌竜山ト云ヨリ松最古タ

リ(二ノ四十オ)

是ハ当地ノ大町西町ノ辻ニ打臥シテ居タハ(中略)タトイ下

妻ノ町中ニ居テモ(七ノ二十七オ)

「巨海代抄」の著者巨海和尚は「日本洞上聯燈録」(卷十二)

によれば、

下総州総寧巨海良達禪師。縁契二養室一。出住二常之玄勝一。移
領三総寧一。(以下略)

とあり、大淵と同じく関宿総寧寺の住持であったことがわかる。総寧寺十三世である巨海文刹禪師は同寺の過去帳によると、慶長四年十一月二十九日寂とあり、大淵の寂年より約三十五年前に入寂している。聯燈録によると総寧寺入院前は現常陸国西茨城郡笠間町に存する五台山玄勝院に住していたらしいが、同寺は永祿元年の創建で、開山を総寧寺九世学仲寛周禪師、中興を巨海良達禪師としているところからして巨海和尚の総寧寺入院は大体文祿頃と思われる。成立のところで触れた遠州掛州の乘安寺はそれ以前なのか明らかでない。

その郷貫についても定かではないが、同代抄下巻三十丁オーウの記述に、仏恵禪師の結制解制の行規を乱した事についての見解を引いた後で、

山僧モ夏ヲバ関東デ結ダホドニ生得禁足安居シテ規矩ヲ乱シ
法度ヲ行ズ可キ事ダ在ルニ夏ヲ破テ東海道ノ傍エ来テ別山デ
ノ解制ヲ夢裏ノ脚ヲ本義デハナイゾ在レ共帰郷ノ旨ヲサエ得
タ郎ニハ苦シウハナイ雨寺ハ一山ヨ

と自己の見解を述べているところからして、巨海和尚の郷貫が東海道で在ったことを思うのである。このほか、

是ヨリ伊勢地ハ渡海フル者モアリ亦タ関東ニ船渡リスル者モ
……(下三十六オ)

本朝板東利根川鬼怒川筑波日光ノ滝口モカラリットシテホコ
リガ起チ亦東海道北陸ノ那姥天流木曾川ノ流レモ……(下・二
十四)

流ニ取テハ或ハ東海道デハ那吒天竜富士川大炊川ノト云テ在
リ坂東デハ利根川鬼怒川新川ノト云テサマノ流レタ在ル
ガ東ノ鹿嶋浦ニ押シ出セバ其ノ衆流ハ……(下・三十オ)
という記述がみられるが、このことは、巨海和尚が関東・東海道
と行き来していたことを物語るものと思われる。

註1 大日本寺院総覽

六

三書の文体は、

ウ、サテハラ主飯宗ト云フ大ロチ者ニ出デ合テ吞却セラレテ
ヲシャッタナ(巨・下・十四ウ)

ヲ、今朝ハトット寒クヲリヤル(巨・下・三十一ウ)

納僧ハ鴻音ヲ聞テモアツハヤ秋ニナッタヨ砧声ヲ聞テモアツ

ハヤ夜寒ムニモナッタヨ(大・二ノ二十三ウ)

亦留ル事三年ダ程ニ遠侍者ノヨツノ是何ソゾ(大・
二ノ二十六ウ)

ヤレ見事ノ杏花ガ開テ走ナ(再・下・二十六オ)

の二三の例が示すようにかなりくだけた文体をとっているが、こ
のような文体の中に今日東部方言として見聞される語彙も多く現
われている。

如何サマエズイ言放善意ヲ含ンダ処ヲ淨(巨・下・十四オ)

二ノ句モヲツヒシイ意気威憚ノコデハ無イ(再・中・三十三
ウ)

梅ノカジケタル影ヲ移シテ(大・三ノ五十六ウ)

此ノ陶鳥ノクゼリハ(巨・下・二十オ)

などはその例と見られるが、以下、今までロドリゲスがその著日
本文典に阪東のことばとして挙げたいくつかの事項を中心とし、
当時、東国語として挙げられている事項を加えて、簡単に紹介し
てみよう。

(一) 指定の表現について

今日普通東部方言の特徴的表現の一つである「ダ」で文が終止
されていることは三書共通である。もともとそれは主として文を
終止する場合に限られており、終止形を含めてその他の活用形は
「デアル」(終止形の用例は少い)、「ナリ」「デ走」「デゴザル」
「デヲリヤル」「デオヂャル」でもって代用されている。ただ、
連体形用法として、

亦万法ニモ不侶底ハアルト見ルハ遠イ万法ガ不侶底ダトキヨ
ソ一口ヨ(巨・下・三十七)

秋満田ノ熟ニ逢テ民ミノカマトモユタカダトキ……(大・一
ノ三十ウ)

爰ノ主ハ上ダ事モ無ク下ダ事モ無イ(再・下・三十オ)

と用いられているが、その数は少く、多くは「ナ」「ナル」で表
わされている。

「ヂャ」は三書を通して「巨海代抄」の

趙州金六チャト云テ(下十二ウ)

の一例しか見当たらない。注目すべきものに、

総別心地ノサビタ人が家マデモ物スゴイ物ダ走(巨・上・十
七ウ)

が数は少いが三書とも「デ走」と並んで用いられているほか、

秋水——一色ト云ラ其儘七夕ノ夜色トミルガ二星エノ謝語

「ダアルカ曹洞門下デ此夜景ニ乗ル底ベシアルカダ」(大・一ノ十九ウ)

心理トハドコデモ自己ノ一主人ノ中ダアレドモ愛デハ当今皇
帝ノ御事ダ(大・三ノ四十四ウ)

といった例も見られ、また「ダアルガ」「ダアルヲ」「ダアレバ」の例も少くないが、後者の例などは「ダ」の下の語は接続詞ととれないこともない。接続について、今日方言に見られる例としては、

瞻仰ハアラギミルダト云ハ仏身ヲ重ンジタ事ダ(大・一ノ三十五ウ)

のような用法もある。

(二) 打消の助動詞

三書とも打消の助動詞には専ら「ズ(ヌ)」が用いられ、「ナイ」は

十二面生得十一面観音ト云ハアレドモ十一面トハ云ハナイ

(大・四ノ十二ウ)

の一例しか見当らなかつた。過去の打消も、

未ダ幽鳥モ音信レナシ(巨・下・三十七ウ)

其ノ木像ヲ早テ舟ニ上セントスルニ終ニ動かナシ(大・五ノ三十七ウ)

のごとく「ナシ」であつて「ナカッタ」は見られない。

(三) 意志推量の表現について

この表現も指定の場合と同様に種々の用法が見られるが、三書とも

(1) 樹上ニタヨツタラバ点類シテ泥口水ヲクラワウズ

(巨・上・十二ウ)

(2) 呑ダラバ咽喉ガ裂ケウズ(巨・上・十三ウ)

の「ウズ」が現われるほか、(2)はしばしば、

(3) 吹毛ノ剣氣ハ開エタホドニ悪ク触レタラバ喪身失命シ

ヨウズ(巨・上・十四ウ)

となつて現われ、また

(4) 生得御法懂トキカバ五百箇三百箇ハ開キ落チニ集ラフ事

ナレ共(巨・上・二ウ)

(5) 未学未証ノ者ニ仏祖ノ大杭玄奥玄旨在ル事ヲ知ラシメフ

ガ為メダ(巨・下・二十ウ)

の形も見える。更に

(6) 空前已前ノ自己言語ヲ以テ答ヨフトシタ(巨・下・三ウ)

推テ見ヤフカ敵テ見ヤフカ(大・二ノ八ウ)

の形もあり、従つて一・二段・サ変の場合は(2)・(3)・(5)・(6)のいずれかの形をとつて表わされている。なおまた、この「ウズ・ヨウズ」には連体用法のほか、「ウズル・ウズレ・ヨウズル・ヨウズレ」の形を見えるが、ロドリゲスが、尾張から関東に至るまでに用いられるといつた「アズズ・エンズ」の形は見られない。が「べい」は、大淵の二書に

此菴静ハ雪キニ釣リシタ蓬屋ノ内チ巢居穴処ノ昔シトモ謂ツ

ベイ(再・中・十ウ)

修行ヲ肝要トセバ一度ハスムヘイ(大・一ノ三十七ウ)

などが見られるが、それは二書で各二例ずつで「巨海代抄」には見当らない。

(四) ハ行四段動詞の音便形について

ハ行四段動詞が「タ・テ」に連なるとき、促音便となるのも東国語の特色と云われている。この三書では

爰ヲ父子路絶ノ処ト云フタゾ (巨・下・四十ウ)

有ル時キ兩僧互イニ向ウカタラツテ (巨・下・八ウ)

とウ音便・促音便の両傾向が見られるが「巨海代抄」ではウ音便の例多く、大淵の二書ではその数は伯仲している。

(五) 形容詞の連用形について

江戸初期の東国方言において形容詞の連用形はウ音便化しないで原形のままであったらしいことはロドリゲスの文典や醒睡笑の例を引くまでもない。「雑兵物語」では殆んどウ音便化していないところからみて、事実そうであったのであろう。

三書ではク形とウ音便形の両形が現われているが、その頻度の上でウ音便化しないで原形のままの用例の方がやや多い。一例を「巨海代抄」にとってみると、概数ではあるが、「ク形」九十例、「ウ形」六十二例となる。三書を通してウ音便化する語をみると、「好」「無」が一番多く現われ、また、この二語は「ク形」をとる場合が他の語に比して少い。

(六) 接辞

「三河物語(元和八年頃成)」に見られる「ヒンヌキ」(上巻)「ヒツスユル」(下巻)の類の接頭辞はこの三書に多く現われている。

促音形には

ウツ走り (巨・上・十ウ)

ツ、放サレタ (巨・下・二十九オ)

ヒッカツイテ (巨・上・二十八オ)

ヲツ放シ (巨・上・八ウ)
撥音形には

ツン出シ (巨・上・五オ)

ヒンナグツテ (巨・上・十五オ)

フンザラシ (巨・下・十四オ)

ランヌイテ (大・五ノ四オ) (巨海になし)

といった「ウツ」 「ツツ」 「ヒツ」 「フン」 「ラツ」形の接頭辞で、いずれも下の語に強い感じを与えている。後期になると、この種の接頭辞はその種類を増して、雑兵などでは「カツ」 「トツ」 「ブツ」 「クシ」 「トシ」 「ブシ」などの形も見られるが、この三書では右に挙げた形のものしか用いられていない。

接尾語としては、「三河物語」にも見られる、「父ケ無」(上巻)のような

サリトテハ禪子^{アイサツ}ゲナ挨拶デハ在レ共 (巨・上・一ウ)

氣頭ニ叶フ人^{アイサツ}ダナ者在ルト思召サヌ (巨・上・十六オ)

「ゲ」が用いられている。

(七) 四つ仮名

四つ仮名の混乱は東国に早いと云われ、「三河物語」にも多くその用例が見られるのであるが、この三書でも

(ヂージ)

灯心ノ一ト筋ジモ在ツテ (巨・下・十八オ)

ナゼニナレバ^{アイサツ}菜ニ与ルカ病ノシタジダホドニ (巨・下・二十四オ)

門戸ヲ閉ジテ (大・四ノ二十二オ)

(ツーズ)

マズ。祖師西来意ノ五字ヲサエ好ウ見届ケタラバ(巨・上・十
四ウ)

泪羅江ノミクズ。(巨・下四オ)

瑕ズ曇リ(大・一ノ四十一オ)

綱ハヲウズナダ(大・一ノ二十六ウ)

一身ヲ持チクスサズ(巨・上・二十三オ)

門ヲ出ズルト云テ(大・二ノ二十二オ)

帙リガ出ズレバ(大・二ノ二十六オ)

門ヲ閉ズルハ(大・二ノ九オ)

ウナズイタ(大・二ノ二十六ウ)

(ズーズ)

遙々ト吾ガ処マデヨコスハツデハナイ者ノヲ(巨・上・二オ)

などの例が見られる。

そのほか、三書に見られる特色あるものを拾ってみれば、自称の代名詞は

ヲレガ処ニ其ノ様ナ残飯ハ始ヨリナイ(巨・上・十五オ)

ヲレラガ様ナ者モ(巨・下・十六オ)

と「ヲレ」が専ら用いられているが、

キヤツ、ハ法様モ知ラヌヤツ哉(巨・上・二十八ウ)

の例も多く現われている。

また

内裏ヘ氷リヨ捧ゲルト云モ(大・一ノ四十一ウ)

荒蕪ハアレトヨム也(再・上・十七オ)

と二段動詞の一段化も大淵の二書にまま現われるほか、同じく動詞で、「借る」は四段の例しか見られないが、「大淵代抄」に

磨キガタリヌ(二ノ二十二ウ)

の例が一つだけ見られた。

一・二段活用の命令形は「―ヨ」であって「―ロ」の形は三書に現われていない。ただ、敬意を持ったと思われる命令の表現に

此ノ句ヲ好ウ占テ御郎ゼイ(巨・上・三オ)

富士山ノ頂上エ上テ見サシ娑婆世男タツタ一目ダ(巨・上・

三十一オ)

の二表現がある。共に連用形用法(御郎ジ・見サシ)を有する。後者の場合は「しも・さしも」と関連あるものと思われるが、また

ヲ、今朝ハトツト寒クヲリヤル先ツヨツテアタラシマイ茶デ

モ呑ンデ語ラシマイ夜モフケテ行ニ寝サシマイ(巨・下・三

十一ウ)

の用例も見られる。これなどは「さしまふ」の命令形であろう。他の活用形は見られない。

三書の中の副詞をみると

老倒スレバ常ガ病者ナドノ様ニウツト、スルモノダ(巨・上・

十一オ)

海底ノ珊瑚枝マデ月ガカツト照シテ(巨・上・十四オ)

といった擬声語、擬態語が目立って表われ、その種類も

イラリット・ウツリト・カツクト・ガント・キツト・キラリ

ツト・クワラリト・サツサツト・サツト・サツラサラト・シ

ツハト・シツホト・シャツキト・スグスゴト・ソツクト・ソ

ツト・チャックト・チャッチコロリツト・ソツト・ツント・トラリツト・トロリツト・トツト・ハッチト・バツト・ハラリツト・ヒツカト・ヒツクト・ヒツシト・ヒヤリツト・ヒラリツト・ヒョツト・フイリフイリト・フツツト・フツト・ヘタヘタト・ポウボウト・ホツキト・ホツクト・マツスト・ムツト・ムツクト・メタト・メツクト・モツト・ユツスト・ヨツヨツト・ワツト・ワツハツト・ラツト・ヲボロヲボロトのごとく多岐多様である。このように擬声語・擬態語が副詞として多く用いられていることは三書の特色の一つであろうが、これらの多くが促音化していることもこれまた特色であろう。他の副詞でも

タツタ今生落テモ (巨・上・十二オ)

トクツト見消シタ (巨・下・五オ)

トククト見入タ (巨・上・十四オ)

疾(トック)ニ騎リ過ギタ (再・中・二十九ウ)

チツト代ラデハ (大・二ノ二オ)

などの促音化の現象を示している。

七

以上、粗雑ではあるが、三書のおおよその輪郭と、読後気づいた東国語的表現や、特徴ある表現などを記述的に挙げてみた。これらのことから、直ちにこの三書が東国語でもって書き表わされたものと認めることはまだいくつかの問題が残されているかと思うが、一応、東国語脈で書かれた抄物として扱ってよいであろう。

なお、さきにも述べた如く、これら禅宗(曹洞)関係の抄物が存したことは二書の成立の当時の情勢から推して、決して偶然的なものではない。従って、この線をたどって博搜すれば必ずや他の資料を見出し得るものと思われる。事実、これら三書の版元である西村又左衛門板の「増補書籍目録」(寛文十年刊)によれば、「巨海代抄」以下、十四世の万極良寿師の「万極代抄」、十八世勝国良尊師の「勝国代抄」を始めとして、大淵和尚の後の人に「代抄」並び「再吟」の書があることが記されてある。

またこれらは版になつて残つたものであるが稿本のまま、あるいは写本として残つたものも決して少なくなつたことも考えられるが、いまは以上東国語の研究資料の一端を紹介しておく。このような資料の存在が江戸時代初期東国語の研究の契機となつて、東国語の正確な認識を深め、ひいては江戸語形成の問題についての一助ともなれば幸いである。

この稿を草するに当つて、金田一・今泉・岩橋の三先生をはじめ、駒大図書館長小川靈道氏、同大学東元多郎氏、史料編纂所玉村竹二氏、また和田利政氏の御思恵にあずかつた事が少くない。なおまた中村通夫先生からはいろいろと御教示をいただいた。厚く御礼申上げる。

——東京学芸大学附属中学校教諭——